

平成 19 年 4 月の解説（府県天気予報）

【4 月の天候状況】

月半ばまでは、低気圧や前線と高気圧が交互に通過してほぼ全国的に天気が数日周期で変化しました。月の後半は北日本では高気圧に覆われて晴れの日が多くなりました。東日本、西日本では、下旬前半までは低気圧や前線の影響を受けて、曇りや雨の日が多く、下旬後半は高気圧に覆われて晴れの日が続きました。南西諸島では前線や低気圧の影響で曇りや雨の日が多くなりました。

月を通しての日照時間は北日本の太平洋側と南西諸島で平年より少なく、その他の地方では平年並でした。降水量はほぼ全国的に平年より少なく、西日本を中心に多くの観測点で平年の 40% を下回りました。気温はほぼ全国的に平年を下回り、平年より 1℃以上低くなった観測点もありました。

【4 月の検証結果】

17 時発表の天気予報で「降水の有無」の全国平均の適中率は明日予報で 81%、明後日予報で 77% と、ともに例年（注）より 3 ポイント低くなりました。地方毎の適中率では、明日予報はほぼ全国的に例年より低く、特に北陸地方では 7 ポイント、四国地方では 6 ポイントそれぞれ低くなりました。明後日予報は北海道、関東甲信、東海、近畿地方で例年より 6 から 10 ポイント低く、九州北部、九州南部地方では例年より 6 ポイント高くなりました。明日の最高気温の予報誤差はほぼ全国的に例年を下回り、特に北海道、東北、関東甲信、東海、北陸地方では例年より 0.4℃から 0.6℃小さく、全国平均では例年より 0.3℃小さい 1.8℃でした。また、最低気温の予報誤差も全ての地方で例年を下回り、特に東北、関東甲信地方では例年より 0.4℃小さく、全国平均では例年より 0.3℃小さい 1.4℃でした。

（注）例年値は気象庁 H P（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【4 月の天気予報から】

4 月 4 日、上空に冷たい空気を伴った低気圧が東日本を通過して（図 1）大気の状態が不安定になり、関東地方南部を中心に広い範囲で雷雨となりました（図 2）。3 日に発表した東京地方の 4 日（明日）の天気予報は「くもり 明け方から朝のうち晴れ 所により昼過ぎから夕方雨で 雷を伴う」で、昼過ぎから夕方に

かけて（12時から18時）の降水確率は40％でした。

この予報では、4日の午後には東日本の上空に真冬並みの冷たい空気が流入するため、主に東北地方南部から関東地方北部で雷雨が発生し易い気象条件になると予想しました。そこで東京地方は一部で雷雨となる恐れがあるものの、広い範囲で雨が降ることはないと判断して、雨が降る範囲を「所により」と表現し、テレビ放送などの天気マークには傘マークはつけませんでした。

実際の天気も、概ね予想通り昼過ぎから夜にかけて雷雨となりました。ただ、その範囲が予想より南の関東地方南部が中心となり、東京地方は全域で雨が降りました（図2）。

上空に冷たい空気が流入して発生する雷雨などは、現象の強さと範囲を正確に予想することが難しいものです。このため、発生した現象が予想に近い場合でも、天気マークの印象と実際の現象とが大きく違うように受け取れる場合があります。

天気予報を利用する際には、天気マークだけで判断しないで、予報文の内容や降水確率も利用するようにして下さい。

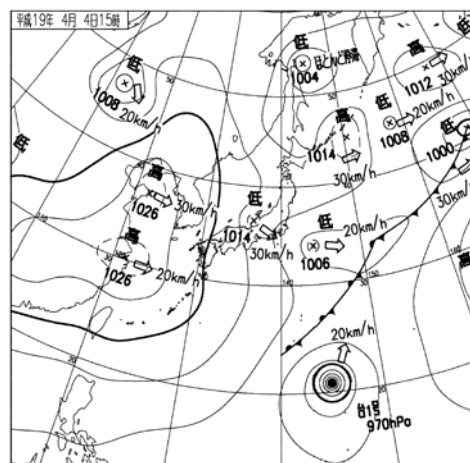


図1 2007年4月4日15時の地上天気図

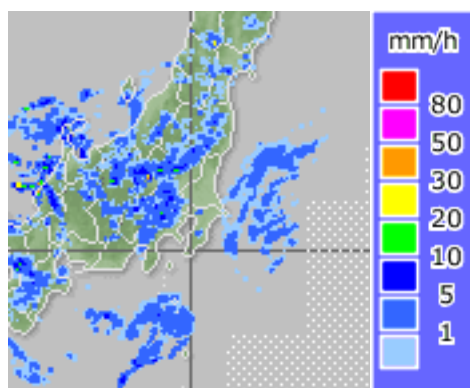


図2 2007年4月4日15時のレーダー観測

【6月の天気予報の利用にあたって】

例年、5月には南西諸島付近に停滞していた梅雨前線が次第に北上して、九州、四国や本州付近に停滞することが多くなり、6月上旬には全国各地で次々と梅雨に入ります。とはいえ、梅雨入りの時期や梅雨期間の天候経過などは年によって大きく違い、梅雨入りしたからといって毎日曇りや雨の日が続くとは限りません。

いずれにしろ、梅雨の時期には毎年どこかで大雨が降り、山崩れやがけ崩れ、河川の洪水や浸水などによる被害が発生しています。梅雨の時期に雨の天気予報が出ているときは、大雨や洪水についての警報、注意報などの防災気象情報に特に注意して下さい。